

里山の自然調査で分かったこと

南部 久男

1999年～2004年度にかけ、多くの方々の協力を得て、富山県中央部の2地域の里山で自然の総合調査を行いました。ここでは、調査全体を通じて分かったことについて紹介します。

三熊は水辺の生きものの宝庫である。

里山には、何十年も前から人が生活していくために作ってきた水田や畑、溜池、用水路、集落、山林、川など様々な環境があります。耕作地には雑草が生え、集落や周辺の耕作地には、カラスやスズメなどの人里にすむ野鳥が生活し、水田には様々なカエルが産卵にやってきます。コナラ林、ミズナラ林などの森林には野鳥や哺乳類が生息し、林床の腐葉土には土壤動物や貝類が、林縁部には蝶などの昆虫がすんでいます。

特に、三熊には、山田に比べるとため池が多いので、水辺に生息する動植物が多く、中には絶滅が心配される希少な生物（絶滅危惧種）が何種類も生息していることが分かりました。植物ではヤマトミクリ、ヒメミクリ、ヤナギスブタなど、動物ではドブガイ、タニシなどの貝類、ヒメガムシ、ハネナシアメンボなどの水生昆虫、両生類ではホクリクサンショウウオなどです。

森林が変わってきた

三熊や山田の森林には、コナラ林、ミズナラ林、両者の混生林、アカマツ林、スギ林などがあります。昔のコナラ林やアカマツ林は薪や炭をとるために定期的に伐採されていたため、伐採跡地やあまり大きくなっていない林、そして「かや場」としてのススキ草地が入り交じっていたと想像されます。

木が燃料として利用されなくなり、林が放置されて40～50年を経た現在では、林が十分に生長し林の中には高木層、亜高木層、低木層、草本層が区別できるほど、自然林に近い状態になっています。スギ林は、安い輸入材により、経済的な価値が低くなり、また、後

継者不足により手入れが行き届かず、材木を提供する林としての価値は低くなっています。マツタケの生産量が激減したこともマツタケの生育に適した林床部の明るいアカマツ林が減少したことを物語っています。調査地周辺の山林の食用きのこの量はかなり減少しており、このことも森林環境に変化があったことを示しています。

三熊のある谷の集水域（水を集める地域）の蒸発散量は富山県平均の700mm程度よりもかなり多い1300mm程度と推定されました。里山の山林で定期的な伐採が行われていた頃は、現在より樹林が少なく、葉から蒸散する水分が少なかったと推測され、そのため当時は現在よりも多くの谷水が流れていた可能性があります。今回の調査時に時々みられた谷の水がれも少なかったのではないかと考えられます。

今回の調査で、2000年代はじめの富山県中央部の里山の自然の状況や里山の生活と自然との関わりの変化もある程度分かってきました。昔の里山の自然に関するデータは少なく、その頃との比較はむずかしいのですが、今回の調査結果をこれからの里山を考えたときの資料として活用していただければと思います。

また、本年7月には、リニューアルオープンする常設展示で、里山のコーナーを設け、「里山にすむ生物と人との関わり」を取り上げます。里山にすむ様々な生き物を詳しく紹介する他、昔の里山の自然と人との関わりについても展示します。ご期待ください。